

『異邦人』における言葉と愛 — ムルソーの言語観について —

渡辺 惟央

【要旨】

本発表は、『異邦人』の主人公・語り手であるムルソーの言葉遣いを文法・語彙の点から分析することで、彼にとつての愛とはいかなるものかを検討する。それによって、ムルソーの用いる不明瞭な言い回しが、神学的観念を排しつつ母・恋人への愛着を表現するための言語戦略に基づいていること、さらには、世界と理性との和解という本小説の本質的テーマを表現したものであることを明らかにする。



【プロフィール】渡辺惟央（わたなべ・いお）…東京大学大学院地域文化研究科フランス科博士課程・パリ第8大学博士課程。主な論文に次のものがある。Io Watanabe『Camus et Brice Prain : un héritage des années 30』(Présence d'Albert Camus 12 (revue publiée par la Société des Etudes Camusiennes) 2020, p. 59-74)、渡辺惟央「シシュポスを殺すこととはできるか—ブランシヨのカミュ論における「弁証法」」(『Resonances』、11号、2020年、1-16頁)、《Un logos sans Dieu : langage et banalité de La Peste》(『カミュ研究』第14号、2019年、68-79頁)、「カミュの「反抗」概念における超越性—ブリス・パラントの比較を通じて」(『日本フランス語フランス文学研究』、第111号、2017年、191-206頁)、「カミュにおける「表現」の問題—1940年代前半の言語観の推移—」(『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』第25号、2016年、41-54頁)。